

精神薄弱児（幼児自閉症児を含む）に試みた 集団音楽リズム療法の実践

石川 正 明

Practice of the Musical Rythm Therapy Applied on the Group of Mentally Retarded Children (Inclusive of Autistic Children)

Masaaki ISHIKAWA

はじめに

前回の臨床報告（1985）は自閉症児，個人を対象にした音楽リズム療法（以下，音り療法と呼ぶ）を紹介した。今回は広島市東区光町にある広島市児童療育指導センターの育成園において石川と石川の指導するセミナー班（10名）で昭和61年8月より11月までの期間，精神薄弱児（幼児自閉症児を含む）のグループを対象とした集団音り療法の臨床的実践報告である。

施設紹介

当園は精神衛生発達遅滞の児童を，日々保護者のも

とから通わせてこれを保護するとともに，適切な指導を行って発達を促すことを目的として，昭和42年4月，広島市に隣接する佐伯郡五日市（当時。現在の広島市

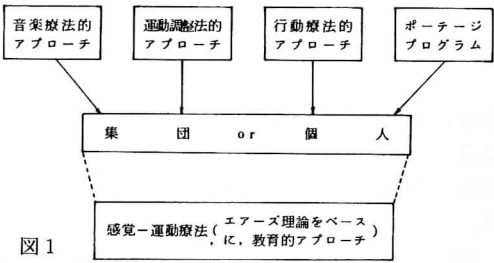


図1

日課表（ディリープログラム）および年間計画

（表1）日課表

曜日 時間	月	火	水	木	金	土	
9:50	登 園 指 導 (通 園 バ ス)						
	身 辺 処 理 指 導						
	自 由 遊 び	※※ クラス療育	クラス療育 おやつ指導 降 園 準 備	自 由 遊 び	※※ クラス療育	自 由 遊 び おやつ指導 降 園 準 備	
	※ クラス療育			クラス療育			
	11:40	給 食 指 導		降 園 指 導 (通園バス)	給 食 指 導		降 園 指 導 (通園バス)
	13:00	自 由 遊 び			自 由 遊 び		
	45	降 園 準 備			降 園 準 備		
	14:30	降園指導(通園バス)			降園指導(通園バス)		

※ 一部クラス交流療育
※※ 一部クラス水泳療育

(表 2) 年間計画

年療育目標	◦豊かに感情表現ができる子になろう。 ◦基本的生活習慣の自立をめざそう。 ◦体力をつけ身体を自由に動かせるようになろう。 ◦意欲的に遊べる子になろう。											
学期	I				II				III			
学期療育目標	◦豊かに感情表現ができる子になろう。 ◦基本的生活習慣の自立をめざそう。 ◦身体を動かす楽しさを知ろう。 ◦好きな遊びを見つけよう。 ◦集団に慣れよう。				◦豊かに感情表現のできる子になろう。 ◦基本的生活習慣の自立をめざそう。 ◦身体を動かす技能を獲得しよう。 ◦いろいろな遊びが楽しくできる子になろう。 ◦友達(集団)に目を向けよう。				◦豊かに感情表現ができる子になろう。 ◦基本的生活習慣の自立をめざそう。 ◦目的をもって活発に動けるようになろう。 ◦遊びこめる子になろう。 ◦ひとりよりは集団でいる方がいいと思えるようになろう。			
月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
行事予定	◦入遠園式	◦◦◦◦◦ ク端家療育 ラ午族育 スの懇キ 参節談ヤ 観句会 ・ 懇談		◦◦ 七クラス タス参 タス観 ・ 懇談		◦◦ ク運動ス 会参 ・ 懇談	◦◦◦ 遠家20 足族周 参年 談談 会念 ・ 行事		◦◦◦ もク ちラ つス つき参 マ ・ 懇談		◦◦◦ 節ク家 分ラ族 ス参 ・ 懇談	◦◦◦ ひ遠卒 な園 ま足式 ・ 参談

佐伯区。)皆賀に中卒者のためのリハビリテーション施設として発足し、昭和49年7月、当センター発足と同時に精神遅滞幼児の通園施設として現在に至っている。

育成園は昭和54年を境に0歳児の受付件数が圧倒的に増えている。このことは、育成園が幼児化し、同時に園児の低年齢化が始まったことを示している。そうなれば必然的に早期対応をせまられるので今までの療育体系を見直し早期療育にふさわしいものを構築することにしたのである。

その柱として、ひとつは職員の研修、他は療育方法の基盤作り、ノーマリゼーションの理念にたった地域への働きかけと融合等の柱である。その柱のなかの療育の方法の基盤作りとして育成園では、図1のような構想のもとに療育の基盤を整理している¹⁾。

追加として昭和61年度の取り組みを紹介する。(表1, 2参照)

ケース概要

この度、当園でセラピーを行った対象児の集団には、3歳児から6歳児までの10名で、それぞれ母子通園5名のグループと単独通園グループの5名である。障害

の状態は次の通りである。(表3)

グループ全員、言語をもたず、情緒障害及び自閉的傾向を伴う精神遅滞の幼児である。

音楽リズム療法の実際

母子通園グループと単独通園グループにセラピーを試みた5ヶ月間、8回のセラピーでグループ全体の行動としての変容、変化は、音り療法の回を増す毎に、つまり少しずつプレイ内容が理解出来るごとに反応効果も段階的によくなるように見受けられた。反応効果とは模倣、行動のテンポ、リズム、楽しそうな顔の表情などである。音り療法のプレイ内容とセラピーの流れについて表4による。尚、セラピーは毎回、表4通りに行った。つまり表4以外のプレイは一切行わない。理由はプレイ内容を徹底的に理解出来るようにとの配慮である。

次に歌唱教材選択のポイントは

- 1) 過去セラピーを行った経験により短調よりも明るい長調の曲であること。
- 2) リズミックでややテンポの速い曲であること。
- 3) 強弱のはっきりした曲。それに理解しやすい言葉で発音しやすいもの。

(表 3・A) 母子通園グループ

対象児		H・N	H・T	A・T	H・I	E・A
年 性 令 別		6 才 男	5 才 男	4 才 男	4 才 男	4 才 男
現 在 の 状 態	食 事	・左利きの為、左手で用具を使用する。 ・偏食なし。 ・フォークを一応持つが、すぐに右手づかみになってしまうので、声かけが必要。 ・おかわりは、お皿をだして要求する。	・フォーク使用。 ・好き嫌いがあり、野菜類は、食べたがらない。 ・ケトチオラーゼ欠損症のため、たんばく質制限をしている。	・フォーク使用。 ・好き嫌いがあり、野菜類は食べたがらない。 主食もそのままでは食べず、味付けのもの、調味料等をかけると食べる。	・箸使用。 ・咀嚼力が弱く、固い物は、たべたがらない。 ・好き嫌いがあり、野菜類は食べたがらない。	・フォーク使用だが、時々、手づかみである。 ・好き嫌いはあるが、がまんして食べれる。
	運 動	・髄膜炎の後遺症の為、右側にマヒが残っている。軽度四肢マヒ。 ・ボールの投げ合いができる。 ・固定遊具に、積極的にかかわって、遊ぶようになった。 ・動作模倣は、部分的にできる。	・意欲的ではあるが、腕力・握力が弱く、その力を要する運動は苦手である。 ・模倣動作が活発で、不確実ではあるが模倣する。	・意欲的ではあるが、腕力・握力が弱く、その力を要する運動は苦手である。 ・模倣動作は、不確実であるが模倣する。	・ほぼ年齢相応の運動能力がある。	・腕力・握力が弱く、その力を要する運動は苦手である。
	言 語	・1対1の場面だと会話もでき、ほとんど理解している。現在・過去・未来の時間的認識はあまりない。 ・多語文だが、場面によっては、パターン言語もみられる。感情表現ができる。 ・新しい場面・人・集団の大きさに影響をうけやすく、緊張・興味をする。	・生活に密着したことは、指示理解がある。 ・言葉が少なく、ほとんど発声であるが、コミュニケーション機能をとまなう発声である。	・指示理解があり、1対1で会話もできる。 ・パターン言語が多く、それをくずされるとパニックになる。 ・時間的、空間的認識はなく、使いこなせない。	・言語理解は、ほとんどある。 ・簡単な単語をならべた会話ができる。 ・言語表現が乏しい。表現意欲は、充分ある。	・生活面に密着したことは、理解している。 ・言語表現は、ほとんどなく快の時、発声がある。
	対 人	・人の存在を意識しすぎる。 ・人の表情・言動に影響をうけやすく、緊張したり、興奮したりする。 ・かかわりを求めてくるが、一方的であることも多く、かかわり方は、本児の要求にねざしている。	・自らの要求にねざしたかかわり方が多く、子供に対しては、特に一方的なかかわり方が目立つ。 ・大人とのかかわりは、嫌がらず、かかわりかえすこともある。	・人によって、かかわり方を決めている時がある。 ・自分の要求にねざしたかかわりが多い。 ・かかわられることは、嫌がらず、かかわりかえすこともある。	・身近な人に対しては、かかわられたり、かわることを好む。 ・はじめての人、また大きい集団の中では、かかわられても、かかわりかえすことは、ほとんどない。	・自分に危害を与える子に対しては、かまえる。 ・大人とのかかわりが中心だが自分から求めることは少ない。
	遊 び	・ボールあそび、ブランコ、トランポリン等、運動的なあそびを好む。 ・ひとりで遊ぶことは、いやがり、常に大人とのかかわりの中で遊ぶ。 ・遊びは、拡がらず、上記以外の遊びは、あまり持続性がない。	・ひとり遊びが中心。 ・運動的なことを好むが、遊具への積極的なかわりはみられない。	・ひとり遊びが中心。 ・乗り物での遊びが多く、遊び方、種類の拡がりに欠ける。	・子供とのかかわりを求めた遊びがみられはじめている。	・ひとりあそび中心で、感覚あそびを好む。
	行 動	・自分の要求にねざして、行動が活発になることがある。興奮すると、行動のコントロールが本児には、むずかしい。 ・情緒が不安定になったり、目的を見失うと、指しゃぶりしたりし、自ら安定しようとする。	・小さな石ころを集めることを好。 ・ひどいこだわりはなく、次の行動に移せる。	・パターン行動があり、くずれると、自己統制ができにくくなる。	・萎縮すると、指かみがあるが、ほとんどみられない。	・砂・石・水あそびに固執する。

(表 3・B) 単独通園グループ

対象児		M・T	D・H	K・K	K・T	Y・K
年 性 令 別		4 才 男	3 才 男	4 才 男	6 才 男	4 才 男
現 在 の 状 態	食 事	・スプーン、フォーク使用。 ・偏食少々あり。	・フォーク、スプーン使用。 ・偏食あり。	・スプーン、フォークでの食事。 ・日によって落ち着いて食事ができる時と立ち歩きながら食事をする時がある。	・にぎり箸で食事をする。 ・食べものの広がりが出ているし、落ち着いて食事をするようになった。	・スプーン、フォークでの食事。 ・落ち着いて食事ができない。 ・口の中に食べものを入れて立ち歩くことが多い。
	運 動	・活発	・揺れる遊具を嫌がる。	・協応動作がうまくできない。 ・動不安があり、バランスがよくない。	・遊具を使って色々な遊び方ができるが揺れる遊具を好む。 ・目的をもった運動ができる。	・高い所、揺れる遊具に対する不安がなくなったので、色々な遊具を使って自発的に遊ぶことが多くなった。
	言 語	・喃語中心。 ・要求はクレーンや動作でやる。	・発語は単語の模倣らしきものが時々ある。 ・名前を呼ぶと手をあげる。 ・簡単な要求表現（クレーン、身ぶり）がある。	・情緒安定している時は生活面での指示理解はほとんどできる。 ・二語文の言語表現。	・単語、擬音語で表現をする。 ・簡単な指示の理解ができる。	・二語文が数語。 ・自発語が多くなった。 ・二つの物から一を選ぶことができる。
	対 人	・母子関係が育っている。 ・他児に対しては、目が向きにくい。	・母子関係が育ちつつある段階。 ・体操、手あそびの模倣あり。	・母子関係ができつつある。 ・母親に対して甘えたり、要求したりする。 ・母親、職員に対して遊びの相手をするように要求する。	・母子関係の確立。 ・父親、兄に対しても自ら、かかわりを求める。 ・小学生の子どもの集団の中に加わりようとする。 ・積極的にかかわりをもつことはできない。	・目が合わないことが多い。 ・母子関係はできており指示によって少し待つことができる。 ・姉達の中に入って遊ぶ。
	遊 び	・見たて遊び、構成遊びなどをするが、一人あそびである。	・砂あそびを好む。 ・体操、手あそびを好んでやる。 ・一人あそび。	・ままごと、砂場で見たて遊びができる。 ・積み木、ブロックでの構成遊び。 ・絵本を見たり、読んでほしいと要求をする。	・自転車に乗る。 ・トライに水を入れて、おもちゃの魚を浮べて持って歩く。 ・揺れる遊具に積極的にかかわる。 ・みたて遊びが盛ん。	・母親の模倣で色々な遊びに挑戦する。 ・姉達との遊びは、汽車ごっこ、かくれんぼ、ままごとが中心になっている。
	行 動	・物の位置などに対する小さなこだわりがある。	・無目的な行動あり。	・情緒不安になると奇声を発したり、人をつめったり、かんだりする。	・こだわりの場面があるが時間は少しづつ短くなっている。	・物に対してのこだわりがある。(石けん、木札、車など)

(表 4) ※A 母子通園グループ指導案【30分間の展開】

時 配	指 導 の 流 れ	指導の具体的方法および配慮事項
5 分	あいさつのうた 挨拶 握手 名前	○治療の開始を子どもに確認させ、音楽活動への雰囲気を作り上げる。 ○挨拶と個々の名前を意識させる。 ○握手をしながらその日の状態を把握する。
20分	毎回きまった歌 不思議なポケット せ ん た く き	○ポケットの中からお菓子、動物、果物（自作教材）等を歌に合わせて出していく。 ○エプロンには柄の無いものを選ぶ。（子どもの注意が柄に集中するから！） ○エプロンのポケットは大きめのものを着ける。ポケットのイメージ作り。 ○動物は子どもによく理解できるものを選ぶ。 ○始めに指導者の範奏をよく聴かす。動きも充分に見せ活動意欲を高めるように配慮する。

5分	おかえりのうた	<ul style="list-style-type: none"> ○リズムカルに自由な身体表現をさす。身体表現は指導者の大きな動きの中で模倣さす。 ○母親、他児とのかかわりの中での表現活動をポイントにする。 ○反応があれば繰り返す。 ○おかえりの歌に子どもの名前を入れ、個々の表情を確認しながら歌いかける。
		※ B 単独通園グループ指導案（配慮事項）
5分	あいさつのうた 挨拶 握手 名前	同 上
20分	毎回きまったうた とを あ け て ちいちゃくおおきく タンブリンのわ	<ul style="list-style-type: none"> ○教師の演奏（タンブリン、カスタネット、鈴 etc）を模倣したり自由な身体表現をさす。 ○各プレイを終わるごとに一区切りをつけるため、一回ずつ決められた椅子に座らす。（全体的にゆるい規制の中で行う。） ○歌いかけ、声かけには、互いが手を伸ばせば届く近距離で行う。 ○お話しは子どもの目の高さに位置してゆっくり話すこと。 ○指導者は積極的に子ども達の中に入りこみ共に楽しみながらリードする。 ○曲の強弱、テンポ等に変化をつけて範奏し、子ども達の表情や動きの反応を観察する。
5分	おかえりのうた	同 上

として、表5に示すものを取りあげた。

（表5）

作 詞 者 作 曲 者	題 名
作詞・作曲者不明	あいさつのうた
ま ど みちお 渡 部 茂	不思議なポケット
藤 田 妙 子	せ ん た く き
阪 田 寛 夫 越 部 信 義	と を あ け て
阪 田 寛 夫 越 部 信 義	ちいちゃくおおきく
山 下 武 夫 岩 河 三 郎	タンブリンのわ
天 野 蝶 一 宮 道 子	おかえりのうた

音り療法のプレイの進め方

最初に“せんたくき”の曲はM男が素晴らしい変化、変容を示した曲である。そのプレイの内容を紹介し、その他として相当、効果のあったと考えられる曲を数曲紹介する。

（せんたくき）

【ねらい】

洗われる洗濯ものになる。みんな一緒にまわされて、洗われたり、ゆすがれたり、しぼられたり、干されたりする無心の動きにポイントを置く。

【自作教材】

エプロン・ブラウス・シャツ・パジャマ

【プレイの進め方】

すべて自由に動くから、洗濯機の中とか、洗濯ものの状態の中でのびのびと動けるように、ナレーションなどで誘導してゆく。

1)（洗濯物は片隅に重なりあって投げ出されている。）

ナレーション 「洗濯ものがこんなに溜まってしまいました。さて、これから洗濯機に入れて洗しましょう」

(指導者は洗濯ものを一枚ずつ洗濯機の中に入れる。洗濯ものは円の中に入って身体を伏せている。

- 2) 「スイッチを入れましょう。……ガチャン！」



(スイッチを入れる真似をすると音楽が始まり、【せんたくの曲】洗濯ものが廻り始める。みんな同じ方向にグルグルまわる。しばらくして今度は逆の方向にまわる。それを何回か繰返し最後に立ち止まる。

- 3) 「今度は、水を流してしましましょう。はいすいのスイッチは……と。……ガチャン！」

(スイッチを切りかえると、【排水の曲A】水が流れたつもり。洗濯ものたちは、立ち止まっていたのが水の流れだす感じと共にグズグズと下にしゃがみ、次第に倒れ伏す)

- 4) 「次は、ゆすぎです……ガチャン！」

(【ゆすぎの曲】水が新しく注ぎ込まれる気持で、洗濯ものはだんだん立ち上がり、またグルグルまわり始める。逆にまわったり、何回か繰り返す。

- 5) 「奇麗に洗えたようですから、排水をして……【排水の曲B】しましましょう」

- 6) 【しぼりの曲】

(指導者は洗濯ものを一枚ずつしぼり機…あるつもり——の所へつれて行き、ハンドルをぐるぐるまわすしぐさをすると、洗濯ものは身体をよじらせて、まわりながら、ペタンコになった感じで横の方に出て来て下に倒れる。次々と同様にしてみんなしぼれて、横の方に折りかさなっている。

「さあ、今度は干しましょう」

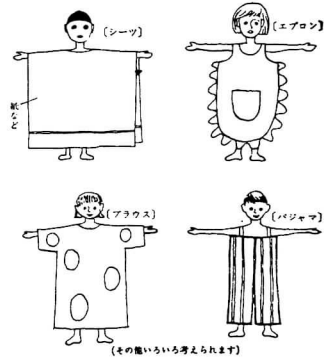
(指導者は洗濯ものを一枚ずつ広げるようにしながら端からつなげ、一ぱいに広げる)

- 7) 【干しものの曲】

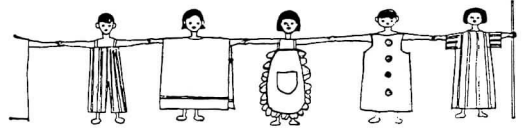
「今日はお天気がいいし、風も吹いているからよく乾くでしょう」

(洗濯ものたち、つながったまま風に吹かれたような動きで、前後に揺れる。)

(A)



(B)



(ちいちゃくおおきく)

【ね ら い】

うたいながら動くことで、子ども達の大好きな「変身ごっこ」のできる歌。

【自作教材】

動物のお面 (象, くま, いぬ, かえる)

【プレイの進め方】

うたいながら、だんだん体をちぢめて、いぬやかえるになる。体のちぢめ方を工夫しよう。3番の「とうとうなんにもなくなっちゃったみえないよ」では、床の上にねそべって、自分の目を両手で押さえる。だんだん大きくなっていく時は、さっきのいぬ、かえるの時の体のちぢめ方をもとに戻す。

だんだん小さくなったら何になるかを指導者は、あらかじめ考えておく。そしてうたいながら、動いてみよう。例えば、だんだん小さくなって、ねこになり、もっと小さくなって、ねずみになる。など。

※歌詞と反対に、だんだん大きくなるのも同じ要領でプレイをする。

※以上のようにいろいろな動物に変身して、自由な表現遊びに発展さす。

【留意点】

※だんだん小さくなったり、大きくなったりする時、体をちぢめるだけでなく、声も自然に小さくした

A

せんたくき
せんたくの曲
Moderato 藤田 妙子 作曲

排水の曲A

ゆすぎの曲
Moderato

排水の曲B

しほりの曲
(ゆーり)

B

ちいちゃくおおきく



り、大きくする。またピアノ伴奏も同じように気をつけて弾く。

(タンブリンのわ)

【ね ら い】

歌いながら、自由にタンブリンをたたかせて指や手の運動に繋がる。

【教 具】

タンブリン (10コ)

【プレイの進め方】

※リズムカルにうたうと、タンブリンも自然にリズムカルにたたける。タンブリンは打つだけでなく、ふっても音のでることを始めに充分に知らせておくこと。

※だんだん慣れてきたら、打つ、ふる、を自分で選択出来るように指導者の範奏でリードする。

※トレモロの音はきれいな音を聞かせよう。

【留 意 点】

シンコペーションのリズムを、できるだけ正しくうたい、ピアノ伴奏すること。

C

タンブリンのわ



山下武夫 作詞
長岡三郎 作曲
早川史郎 編曲



音り療法とは

私の提唱する音り療法が音楽療法と異なる点は動き（リズム）をポイントにするところである。つまり、前回（1985）で述べたように（歌う＋動き）（弾く＋動き）（聞く＋動き）のように（音楽表現活動＋動き）の動きに治療価値を見出したのである。現在、日本の音楽療法の治療原理は村井氏によれば一つはアルトシューラーによる音楽の生理的・心理的作用を基礎とした、精神療法的治療原理であり、他の一つはシアーズによる音楽療法の行動科学的治療理論である。つまりアルトシューラーが「きく行為」としての音楽の治療性を明らかにし、一方シアーズは「する行為」としての音楽の治療性を明らかにしている²⁾。現在、我が国で行われている代表的な音楽療法のひとつ山松質文の山松方式なる音楽療法がある。つまり一口で云えば（音楽「聞く」＋動き）で一見音り療法と似かよった点があるが、実は動きに相違点がある。山松方式の動きは主としてトランポリンによる体育的要素を含む動



きと解釈する。音り療法の動きとは音楽的表現活動（歌う、弾く、聞く、作る）を要素とする動きである。その動きの効果は動く、つまり踊りながら聞く、歌う又は踊りながら叩く（タンブリン、鈴 etc）と云うことは、聞く、歌う、弾く、動く楽しさが倍加しその楽しさが大きければ大きいほどストレスの発散も大きく音り療法の目標のひとつ、心の解放、情緒的開放に繋がってゆくのである。A. M. ドローリエによれば「治療の基本は、身体的感覚的な刺激を一貫して強力に与えることである。しかも、それは、楽しい遊びの雰囲気をもつ構造化された人間的環境のなかで与えなければならない³⁾」この自閉症児にたいする治療教育論は、わたしの提唱する、遊びを原点とした、音楽的運動反応と歌う活動による言語の改善を内容とする音り療法と共通した考えである。此の点、これからの音り療法の研究に多大な自信、勇気を与えてくれるものである。音り療法のもう一つの大きな目標は音楽を伴う楽しい動きのなかで幼児対治療者のスキンシップを通して音楽感覚的領域を刺激することによるラポートづくりとコミュニケーションの改善とに音り療法の意義と価値を見ることができる。

考 察

今回はセラピーの回数が8回（8月～12月までの実施回数）と少ない。それ故今回の発表は効果と云う観

点よりも音り療法の実際指導の紹介にポイントを置いた。セラピーは、わがセミナー班の学生10名保母職員3名と石川で当たった。11人の対象児を2つのグループに分け、またセミナー班も半分に分け、前半のグループ（母子通園）後半のグループ（単独通園）をそれぞれ30分間のセラピーを行った。セラピーの部屋は集会室を使用した。セラピーに先だち部屋の飾りつけその他幼児の目につく品々を凡て排除する。セラピーに必要な品々は幼児の手の届かないところに置く配慮が必要である。今回、障害児のなかには多動 (hyperkinetic) な行動をもつ幼児数名いたが幸にも学生数が多かったのでスムーズにセラピーが行われた。障害児の反応、効果の面であるが期間の短い割合には一回一回のセラピーに変容と効果が見られた。

(事例1) M男は実際指導のところで紹介した“せんたくき”の曲だけによく反応した。3回目のセラピーのときである。盆の休暇明けでグループ全体の雰囲気が何時もより落ち着きが無くいらしている態度、表情が見受けられた。その中でA男はパニックに近い状態で泣叫んでいたが、やがて例の“せんたくき”が始まると次第に泣声も小さくなり身体も学生たちの方へ向き直し、しばらくの間、プレイを見ていたが、やがて立ち上がり洗濯機に入れる上着を手間取りながら着てボタンかけまで済ませやがて笑顔でリズムに合わせながらグルグル廻り始めたのである。数分前のあのパニックはまるで嘘のようであった。

(事例2) 5回目のセラピーは母子分離の形で行った。平素は母親と一緒に母子治療を行うのである。セラピーを始めると同時にN男は激しく泣き始めた。学生たちは石川の指示により彼に構わずプレイを始めた。N男は幾度か母親のいる方へわめきながら駆けだす。その度毎に担任の職員に連れもどされる。激しいパニック状態である。それにもかかわらずプレイを始めて数十分過ぎ位から徐々に平静を取戻しグループに入り始めたのであった。セラピーの始めごろは全体の雰囲気がNの泣声によって少なからず連鎖反応が起り騒々しい状況で始まったのであるがNの落ち着きと並行してグループ全体の連鎖反応も治まり平常のセラピーが行われたのである。

以上が大きく目立った効果である。この外に音り療法の治療目的である模倣、笑顔の表出する心の解放等が見られた。

自閉症児は先ほど挙げた模倣を始めとして運動、遊

び、言語、対人関係、などに特徴的行動があるため、これらの行動に対し音り療法をとおして培ってゆくわけである。つまり、音り療法の中身には先に挙げた特徴的行動を培う要素が凡て含まれているのである。例えば模倣を例にとれば学生たちの示範をみて障害児たちがその動きを真似るとかグループを通して対人関係、遊びの育成、好きな歌の歌唱などから音声、言語を引き出していく、また、リズム楽器を打つことにより手の運動つまり各、指を強くすることにつながる等である。障害児たちの行う（音楽＋動き）は心と体のすべてを駆使して障害児たちの心の解放、心の健康に繋がるような経験となりうるのである。

今回の音り療法の対象児は精薄児、幼児自閉症児である。音楽は対象がどのような知能のレベルであっても受け入れられる性質のものであって、更に世界共通の非言語的コミュニケーションの手段であると考えられている。事例に見られた笑顔、落ち着きの現れは、この観点からとらえた音り療法の効果の現象のひとつであると考えられる。

音り療法の治療目標に関して日常における身辺自立の確立と処理がある。幼児が園においてうまく適応するためには、その自立行動が成立しなければならない。その一つの例として着衣が一人でできない。このことは音り療法の計画的な指導プログラムのなかで当然として促進されるべきであるが対象児たちは最初からシャツ、パンツなどはき方、着方の課題に自ら自主的に取り組むことはないし、またできもしない。しかし(事例1)に見られるように曲によっては或る日或る時、突然着る仕種を示す。

その切っ掛けをチャンスに細分化された指導プログラムに沿って色々アプローチさせていくわけである。このチャンスの出現までつまり、課題学習を狙った段階までは音り療法によるラポート作りの段階である。今回の対象児はピアジェの唱える感覚運動段階つまり発達段階の低い幼児であって、音り療法はこの段階の幼児にとってまことに有効だと考えるのである。

今回のセラピーは8回と少ないけれども毎セッションを楽しい雰囲気で行われたのが大きな特徴であった。音り療法の目標は社会に学校に適応できる基礎的能力を培うことを最終の治療目標とするけれども当面の効果はセラピーを楽しんでやらなければ効果に繋がらない。しかし、ただ単に楽しんだ喜んだから治療効果があったと考えるのは早計であってこのことは飽くまでも幼児一人一人の発達段階と個性によくマッチして計

画的治療プログラムのうえに立つ楽しさでなければ意味をなさないことはいうまでもない。治療を成功させるために相手自身がよく理解できるようなプログラムでなければならない。今回の失敗例として「ジャックと豆の木」がある。このプレイの進め方はこの物語のお話を中心としそれにペープサート、ウッドロック、木琴、太太鼓、拍子木、ピアノ、等を使用しそれに動きを加えてプレイを進めたのである。脚色は対象児が2、4歳の精薄児であるからその点にポイントを置いて脚色したつもりであったが結果としてはストーリーが難しすぎて失敗に終わったのである。プログラムを計画するにあたって必ず相手が理解してくれるのあろう絶対的な満足感、達成感を与えることが出来るような綿密なプログラムが準備されなければならない。音り療法における選曲は対象児の音楽性の発達段階に即したものでなければならない。その意味において童謡に焦点を当て選曲をし、曲は明るく、リズムカルでテンポのやや早いものを選んだ。アルトシュラーの同質の原理に従いパニックに備えモル（短調）の曲も準備すべきところであるが今回は山松氏が提案するところの異質の原理を採用し試みた結果（事例1）（事例2）で分かるようにパニックをすべてドウア（長調）の調子でアタックしたので或る程度、異質の原理の評価を見出したのである。曲によって相手が大きく乗ってくる曲とそうでない曲とがある。勿論、個人差はあるけれども、その反応のあった大半の原因は曲の内容でそれに自作教材（ペープサート等）そして音楽を含めた周囲の状況、雰囲気などの点に有ると考える。（事例1）におけるあの素晴らしいM男の反応効果の曲の内容としては明るくリズムカルで軽快な曲であってそう特別に取り立てるほどの特徴はない。となれば“せんたくき”の曲とそれに小道具の上着が相俟って効を奏したものと判断する。（事例2）は先ほど述べた曲（音楽リズム）+小道具+楽しい雰囲気との連続の効果であると考えられる。今回は残念ながらラポートづくりの段階でセラピーを終了したが音り療法はこの段階で留まるのではなく或る段階まで来れば当然ラポート作りと課題学習を並行して進める長期療法である。

今後の課題は対象児が幼稚園に社会に適応できる基礎的課題学習をどのように反応させまた、身に着けさせるかということにある。

要 約

本研究は広島市東区光町にある児童総合相談センターにおいて精神薄弱児（幼児自閉症児を含む）のグループを対象とした集団音楽リズム療法の臨床的実践報告である。

今回の発表はセラピーの効果、変容と云う観点よりも音楽リズム療法の実際指導の内容の紹介にポイントを置いた。今回、音楽リズム療法に使用する曲は対象児の音楽性の発達段階を押さえ童謡を採用した。選曲のポイントは過去セラピーを行った経験により短調よりも明るい長調の曲、そしてリズムックでややテンポの速い曲そして強弱のはっきりしたものを前提とし、それに幼児の興味、関心をそそるようなまた、理解を早めるような自作教材（ペープサート etc）を加味しながら選曲を行った。

前半で紹介した治療プログラムは今後、対象児がどのようなプログラム内容に反応するかの情報提供に役立つ。反応効果についてはその大部分を曲が占め、それにペープサート etc の自作教材と音楽を含めた周囲の状況、雰囲気によるものと考ええる。（事例1）（事例2）の著しい反応効果のベースは（音楽表現活動+動き）として、つまり、曲+自作教材・教具・楽しい雰囲気等が総合されてあの素晴らしい反応効果が発揮されたものと考えられるのである。今後の課題はラポートづくりと並行させて行う基礎的課題学習（園に社会に適応できるための基礎的能力）の効果的導入法の治療プログラムの計画とその実践の取組である。

文 献

- 1) 広島市児童総合相談センター：センター概要——10年のあゆみ——，1985，pp. 125～129.
- 2) 村井靖児：音楽療法入門，芸術現代社，1977，pp. 67～68.
- 3) A. M. ドローリエ，C. F. カールソン共著，高木俊一郎，佐藤文子共著：自閉症児の治療教育，家政教育社，1979，pp. 8～9.

楽譜（指導・解説）

- (A) 藤田妙子：自由表現ABC，フレーベル館，pp. 38～44.
- (B・C) 小林美実：幼児の音楽遊び—3，おどってみよう，たたいてみよう，フレーベル館 (B) pp. 20～23 (C) pp. 74～76.

Summary

This is our report on therapeutic practice of the musical rhythm therapy applied on the group of children who are mentally retarded (inclusive of autistic children) at Day-Care Center in Hikari-machi, Hiroshima.

Actual therapy was conducted by ten of my seminar students and three nurses from Child Care Center. Children were divided into two groups; one for children who attend school accompanied with their mothers, and the other by themselves. Seminar students were also divided into two, and they performed above mentioned therapy for the period of 30 minutes for the two groups.

The purpose of issuing this report rests, primarily, on the introduction of content of this musical therapy itself and emphasis are not, necessarily, placed on the results or diversified form of its process.

We chose 'children's songs' to be applied in this therapeutic study and they are not geared to the development of children's musical sensitivity. From our past experience of the similar therapy, we chose the melody of major key which have much joyful mood rather than the music of minor key, and further, we carefully chose the melody of rather speedy tempo and one with much clear rhythm along with some musical instruments to attract children's interest and attention.

The Effect of Musical Therapeutic Practice

Example 1 showed a remarkable effect of this therapy noticed in the child T which, in my opinion, is responsible for the joyful, rhythmical tone of the music and none other particular reasons; thus the melody of "Washing Machine" along with the instrument resulted in a very effective way.

Example 2 also can be considered as the effectual result of the above mentioned rhythm, instrument and joyful mood or the succession of them.

The therapy this time ended at the stage of "Rapport" (meaning children in harmonious rapport with therapist), however, the ideal form of the musical therapy should not stay at this stage. Rather, it should advance beyond the "Rapport" stage onto other lessons in parallel.

Some major problems remain for us, therapists, in the future practice, which is, how to make response of children in the area of basic lessons and have children learn by themselves and eventually to become adaptable in the society.